

乱読のススメ

—乱読こそが読書の喜びの源泉だ—

大神田 丈 二

1

乱読のススメについて書こうと思う。しかし、乱読という言葉はイメージが悪いのではないか。広辞苑によれば、乱読とは「何の方針も立てず、手当たり次第に書物などを読むこと」とあり、英語では「乱読家」のことを“gobbler”というが、“gobble”という動詞は「ががつと貪り食らう」という意味で、ここには記せない卑猥な意味もあって、当然ながら英語の乱読のイメージは芳しくない。日本語の乱読についていえば、広辞苑の定義はいかにも穏当で、それだけでは可も不可もないが、乱読の「乱」の訓読みは「みだ」であり、「みだり」を引けば、「乱り・妄り・濫り・猥り」と剣呑な漢字が並んでいる。そして、これらにさらに「淫らな」なども加えるとするならば、乱読は「妄読」とか、「猥読」とか、「淫読」とかという言い方も可能だろう。つまり、乱読には英語の“gobble”ほどではないとはいえ、やはり「みだらな」含蓄があることは否定できない。やはり乱読のイメージはよろしくないようだ。そのススメは、濫飲、濫行のススメと同じく、本来勧めるべきことではないのではないか。

それでは乱読ではなく、多読のススメならばどうだろう。詩人長田弘は「世界は一冊の本」（長田弘『世界は一冊の本』みすず書房、2010年）という詩を、

本を読もう。

もっと本を読もう。

もっともっと本を読もう。

と高らかに謳い上げていた。「もっと本を読もう」、多読のススメならば、いささかも良心に恥じることはない。多読は文字通り「本をたくさん読むこと」であり、乱（みだり）に多読すれば「乱読」に堕しかねないが、とりあえず淫らな意味は含まれていない。英語の“well-read”も同様だ。英和辞典には、「多読した、博覧の、博識の、博学な」などと意味が恭しく列挙されており、日本語の「多読」よりも、本をたくさん読めば、博識になり、人から尊敬されますよというありがたい含みさえもあるようだ。

哲学者三木清は名エッセイ「如何に読書すべきか」（「青空文庫」参照）の中で、「読書は一種の技術」なのだから、各人が自分に適した読書法を發明する必要があり、「ところでかように自分自身の読書法を見出すためには先ず多くを読まなければならぬ」といい、乱読については、

多読は濫読と同じではないが、濫読は明らかに多読の一つであり、多読は濫読から始まるのが普通である。古来読書について書いた人は殆どすべて濫読を戒めている。多くの本を濫りに読むことをしないで、一冊の本を繰り返して読むようにしなければならぬと教えている。それは、疑いもなく真理である。けれどもそれは、ちょうど老人が自分の過去のあやまちを振り返りながら後に来る者が再び同じあやまちをしないようにと青年に対して与える教訓に似ている。かような教訓には善い意志と正しい智慧とが含まれているであろう。しかしながら老人の教訓を忠実に守るに止まるような青年は、進歩的な、独創的なところの乏しい青年である。

と乱読が自らの読書法を發明するためには必ずしも否定すべきものではなく、先に多読も乱らになれば乱読に墮すなどと書いてしまったけれども、順序は逆で、そもそもは多読は乱読から始まることを認めていたのだった。そしてさらに、その誤謬、危険を冒さない限り人は読書においても何事においても飛躍的な発展は遂げられないと述べているのだが、しかし、乱読はやはり誤謬である限りにおいて（ちなみに誤謬と言っているのは三木清だ）、早晚脱却すべきものなのだった。いわば乱読は多読から博読へ至るために最初に克服すべき必要悪だというのだろう。

三木清が乱読を認めているのは、乱読という多読を経なければ、自分自身の気質に合った読書法に到達することができず、自分に必要な本も見いだせないからだだった。

読書は先ず濫読から始まるのが普通である。しかしいつまでも濫読のうちに止まっていることは好くない。真の読書家は殆どみな濫読から始めている、しかし濫読から抜け出すことのできない者は真の読書家になることができぬ。濫読はそれから脱却するための濫読であることによって意味を有するのである。

濫読に止まるなどということは多読してはならぬということではない。多読家でないような読書家があるであろうか。寧ろ読書家とは多読家の別名である。諺に、賢者はただ一冊の本の人間を恐れる、という。ひとは多く読まなければならぬ。読書の必要はただ一冊の本の人間にならないために、云い換えれば、一面的な人間にな

らないために、存在するのである。単に自分自身の時代のみでなく、また過ぎ去った時代について、単に、自分自身の国のみでなく、また世界について、全体の生活と思想について正しい見通しを得るために、多く読まなければならぬ。即ち読書において、一般教養を心掛けることが大切である。読書家とは一般教養のために読書する人のことである。単に自分の専門に関してのみ読書する人は読書家とはいわれぬ。

乱読・多読はやはり、真の読書家、真の教養人になるために、アウフヘーベン（揚棄）すべきものなのであろうか。しかし、ここでは敢えてアウフヘーベンせずに、最初の目論見通りに、多読ではなく、多読以前の混沌とした無秩序な読書、乱読にこだわりたい。乱読には、多読にはないダイナミズム、つまり何が生まれるか予測のつかない可能性があるからだ。そこに大なる読書の喜びがあると信じるからだ。

勝負は勝ち負け、結果がすべてだと信じる人がいる。だが、物事を結果論で判断することほど虚しいことはないのではなかろうか。結果の良し悪しは考えない。そもそも結果などは最初から念頭にない。読書することだけに集中し後先は考えない、そんな読書があってもよいと思うのだ。乱読には何が生まれるか予想のつかぬ可能性があると言いたが、その何か生まれてくるかも知れぬものを期待しつつ、可能性を可能性の状態のままに留めおくような読書、乱読を勧めたいのである。

三木清の読書論はケチのつけようがない。読書論の王道を行く読書論である。だから、それに対して今ここでオルタナティブな（もう一つ別のあり得る可能な）読書論を提示しようという大それたことを考えているわけではない。ただし、三木清が「読書を欲する者は閑暇を見出すことに賢明でなければならぬと共に、定期的に読書することを忘れてはならない。毎日、例外なしに、一定の時間に、たとえ三十分にしても、読書する習慣を養うことが大切である。かようにして二十年間も継続することができれば、そのうちにひとは立派な学者になってるだろう」とぼろっと書いてしまっているのを読むと、その最後の部分、「立派な学者」という結果に重きが置かれているのかなとふと思ってしまう。もちろん「立派な学者」は反語だろう。とはいえ、三木清の思考も論理も柔軟で結果論に傾いているわけでは決してないけれども、彼の読書論を読んだ者のなかには、継続的な読書がすべてであり、「立派な学者」に到達するための唯一の道だと信じる者がいても不思議ではない。

3

読書論は言うまでもなく読書性善説に立っている。誰も読書が悪いものだと思って勧める者はいないだろう。勧められる方も性善説を暗黙のうちに、無反省に受け入れ

ているのではないか。ひとつ喩え話をしよう。火にまつわる神話、プロメテウスの神話である。

ギリシャ神話によれば、プロメテウスが、ゼウスによって火を取り上げられ、寒さに震え、生肉を食べている人間を哀れんで、ゼウスの禁令を犯して人間に火を与えたのは、火が人間に大いなる恩恵を与えると信じたからだった。一方、人間に火を与えることを禁じたゼウスは、火が人間に惨禍をもたらすことを知っていたからこそ禁じたのだった。そしてゼウスの予言どおりに、人間は火によって暖をとり、生の食材を煮たり焼いたり調理することができるようになったものの、火を使って武器を作り戦争を始めてしまった。怒ったゼウスは神々に命じてプロメテウスをコーカサス山の山上に磔し、プロメテウスは生きながら毎日肝臓を大鷲についばまれるという罰を受けることになる。不死であるプロメテウスの肝臓は夜中に再生し、この劫罰は許されるまで三万年続いたという。

プロメテウスは火は人間を幸せにするものと考え、良かれと思って人間に火を与えた。読書を勧める親や教師も、読書はいつか必ず役に立つと信じて、子どもや学生たちに勧める。しかし、読書の危険性について教えることはないのではないか。さすがに三木清はそのことを知っていたから、ただ乱読するのではなく、読書の技術を身につけるべきであることを強調した読書論を書いたのだった。火は恐いものだ。それを制御する技術を確立しなければ、いつか火は思わぬ災害を引き起こす。「プロメテウスの火」が何の暗喩かは言うまでもない。そして、プロメテウスの火と同じように本が、読書が災いをもたらすことがあるのではないか。例えば、読書に耽溺するあまり、浮世離れしてしまう。書物の世界の方が現実よりもリアルになってしまう。とくに文学を好む少年少女、今は流行らない言葉だが文学青年にその危険がある。

素九鬼子という匿名作家の『旅の重さ』（角川文庫、1977年）を原作にした同名の映画（斎藤耕一監督、1972年）に印象的なシーンがあった。主人公は女優高橋洋子演じる家出少女で、四国をお遍路だと偽って旅しているのだが、一人の貧しい少女と出会う。まだほとんど無名であった女優秋吉久美子が演じていたその少女は、家が貧しいものだから内職の手伝いをさせられており、彼女の唯一の楽しみは少ない小遣いで岩波文庫の古本を買って読むことだった。やはり文学少女であった主人公がその少女と漁港の棧橋にすわっておしゃべりをするシーンがあり、家出少女が「小説好きなの？」などと聞くと、少女は「小説の世界のほうが本当のような気がするの」と答え、ほどなくして少女は唐突に海に身を投げて自殺してしまう。家出少女は母に自分もしも家出をしていなければ同じことになっていたかも知れないと書き送る。家出少女は家出したことで現実に出会えたのだが、文学少女は現実から逃れられず、現実にはない小説の世界に身投げしてしまったのだ。

書物にも読書にも責任はないが、それらが人に災いをもたらすこともある。そんな話は歴史上枚挙にいとまがない。秦の始皇帝が行った焚書坑儒は、書を焼き捨てただけでなく、儒者たちを坑に生き埋めにしたのだった。どうやら、プロメテウスの神話を喩え話として読書の危険性について述べたけれども、古来火と書物は厄介で悲劇的な関係にあるようだ。

最近チリ出身でスペイン国籍の映画監督アレハンドロ・アメナーバルの『アレクサンドリア』（2005年）を観た。16世紀のコペルニクスが「地動説」を唱えるはるか以前の西暦4世紀にすでに、「天動説」に疑問を抱いていた女性天文学者ヒュパティアの半生をアレクサンドリアを舞台に描いた歴史巨編である。アレクサンドリアには世界中から集めた万卷の書物を蔵するアレクサンドリア図書館があり、世界の学問の中心であったが、映画では台頭してきたキリスト教徒によって異教徒の巣窟とみなされ図書館は完全に破壊され、ヒュパティアも異教徒の魔女として残酷な殺され方をする。人は人に対しても、書物に対しても、どこまで残酷になれるのか。図書館の書物、といっても当時はパピルスの巻物だが、それら貴重な知の財産が破られも焼き捨てられるのを映画で観て目を背けたくなくなった。

この映画を観た数日後、セルビア人作家ゾラン・ジフコヴィッチの幻想短編集『ゾラン・ジフコヴィッチの不思議な物語』（黒田藩プレス、2010年）を読んだ。所収の「火事」という短編の主人公は、図書館司書をしている女性で、夫婦関係が冷え込んでいる悩みから、ある日不安な夢を見る。古代の図書館（たぶんアレクサンドリア図書館）が火事で崩壊する夢を見るのだ。さらに出勤して自分が使用しているコンピューターをつけるとモニターに夢で見たままの火事の様子が映り、同時にコンピューターが火を吹き、主人公はスプリンクラーの水で濡れネズミになるという話だった。図書館炎上。こういう飛び火、偶然の連鎖は乱読の賜物だろう。この場合は、本の乱読ばかりでなく、映画なども乱読的に観ているから生ずる楽しい（あるいは悲惨な）偶然の連鎖である。そういえば、英国の小説家デイヴィッド・ロッジにもそんなタイトルの小説がなかったかと思ったら、『大英博物館が倒れる』（白水社、1992年）だった。

焚書坑儒で思い出すのはレイ・ブラッドベリー『華氏451度』（ハヤカワ文庫SF、2014年）である。華氏451度は書物が発火する温度だという。書物が禁制品になったその未来の国家ではファイアーマンは消防士ではない。フランスの名監督フランソワ・トリュフォーの同名の映画（1966年）を観たとき、けたたましく消防自動車が出動するので何事かと思いきや、どこにも火の手などがおらず、消防士たちは一軒の家のドアを蹴破って入ると、書物を家から運び出して山積みになると、火炎放射

器で火を放つのである。翻訳ではファイアーマンは、消防士ならぬ昇火士と訳されているが、なかなか巧みな洒落である。しかし、こんな世界は洒落にならない。映画の最後、官憲の目の届かない森の中で、本好きの人たちが本を後世に残そうと、それぞれ一冊ずつ本を暗記しているところが胸をうつ。しかし、小説には未来の希望の光が見えるものの、火はまたいつか書物を焼きつくすかも知れない。

5

閑話休題としたいくらい話が逸れてしまった。放っておくとますます逸れていきそうなので、ここでまた本筋にもどすが、乱読のススメなのだから、これくらい逸れても問題ないともいえる。いや、もっと箍を緩めてもよい、もっと逸れてもいいよと悪魔の囁きも聞こえる。しかし收拾がつかなくなっても困る。三木清の読書論にはケチのつけようがないという辺りまでもう一度もどることにしよう。

三木清の読書論にはケチのつけようがない。あらゆる読書論はつまるところ三木清の読書論に収斂するのではなからうか。今まで紹介してきたことと重複するが、その内容を改めて要約してみよう。

まず読書において大切なことは習慣を作ること。義務や興味本位だけで読書はできないからである。また勇気も必要だという。人は必ずしも読書するのに恵まれた環境にいるわけではないから、何をおいてもまず読書すること、いわば見る前に跳ぶ勇気が必要だ。だいたいそうしないと読書そのものが始まらない。そして、読書は一種の技術なのだが、技術は習慣的にならなければ身につかない。読書の技術、読書法は人それぞれなので自分で発明する必要がある、自分自身の読書法を見出すためにはまず多く読む必要がある。青年は乱読も恐れてはならない。というのも、乱読、多読しなければ、自分の必要とする一冊が何であるかもわからないからだ。

しかし、乱読にとどまっていたはならない。乱読は乱読から脱却するための乱読でなければならないからだ。ただし多読は否定しない。古来多読家でないような読書家はいないからである。とはいえ、自分の専門に関する読書しかしない人を読書家とはいわない。乱読と博読との違いは、その人が専門を有するか否かであり、何らの方向性もなく目的もない多読・博読は乱読であり、そのような読書で得た知識、一般教養はディレッタントイズム（道楽）以外のなにものでもない。しかしながら、目的を持って読書する、目的がなければ読書しないというのは功利主義であって、そのような功利主義はかえって有害である。目的のない読書、読書のための読書によって人は一般教養に達することができるからだ。

次いで三木清はタイトルにある「如何に読むべきか」から「何を読むべきか」へと話題を転ずる。両者は関連しており、博く読むためには、書物の種類によって読み方

を変える必要があり、そこに読書の技術が存するという。人が善いものと悪いものとを見分けられるようになるのは、善いものを読むことにあり、その逆ではない。善い本は必ずしも読み易くはないが、分厚くとも、難しくとも、その領域でもっとも善い本を努力して読むべきだ。一度で理解できなければ再読すればよい。そして、読書においてぶつかる困難を克服するためには、系統だった読書をするようにしなければならない。ところで一般に何が善い本かといえ、歴史の試練を生き残ってきた古典である。古典を読むことによって書物の良し悪しを判定する鑑識眼を養える。ただし、古典ばかりで新刊書を否定するのも愚である。古典を偏愛するあまり新刊書を嫌悪する者は趣味的になる傾向があり。それもまた一種のディレッタンティズムに他ならないからだ。逆もまた然り。新刊書漁りばかりして古典を顧みないのも、別の種類のディレッタンティズムである。さらに、古典を読むことが大切であると同様に原典を読む努力が必要だ。解説書をいくら読んでも原典の豊かさには敵わない。できるだけ原書を読むことも勧める。

さて、古典であれ新刊書であれ、善い本を読まねばならぬことは自明の理であるが、しかし、本の良し悪しの判定はさほど容易ではない。とはいえ、自分に適した本は自分で探すしかなく、努力して特に古典の中から適したものを見つけなければならない。それによって自分独自の思想が形作られ、愛読書も定まるのである。愛読書を有しない人は思想的に信用ができないし、愛読書があればこそ、読書も自ずから系統立ってきて、無系統な博読、つまり乱読には陥らないのである。

「如何に読書すべきか」はさらにもう少し続くが、要約はこのあたりでやめておこう。三木清が書いているように読書が続けるならば、皮肉でも、反語でもなく、誰でも立派な学者になれそうだ。三木清自身が彼の書いたような読書法を実践してきたのだろう。しかし、三木清の文章にはある時代の教養主義が芬々としていないだろうか。志が高く、能力も高い、エリート青年たち向けの文章ではないか。人はこのようにして自分の読書の技術を磨き、本の良し悪しが判定できる鑑識眼を磨いて、自分に適した愛読書を探し当てられれば、自ずと系統立った読書ができるようになり、やがて専門知識も一般教養も豊かな人になれる。本当にそうだろうか、と疑っているわけではないが、この王道的読書法は何か敷居が高くて窮屈である。

6

そもそも誰もが王道を行けるわけではない。邪道を好む者もいるだろう（王道の反対語は邪道ではなくて霸道だが、ここでは敢えて邪道を使う）。邪道という言葉がふさわしくなければ、王様の歩む道ではなく、一般庶民の歩く道の方が気楽でよいと思っている者が大多数ではないか。読書の王道を踏めば、三木清の歩んだ道を行けば、

物識りになる、博識・博学になり得るかもしれない。立派な学者になり得るかも知れない。しかし、本など読まなくとも、自分の眼や耳で直接情報を集めて物識りになった人はいくらでもいるし、人生経験を積んだ老人の知恵はあだや疎かにはできない。先に挙げた長田弘の詩にある「本を読む」とは、書物のことであると同時に、世界のすべての事象が本であり、それらを読むこと、それらに眼を向け、耳を傾け、触れ、においを嗅ぎ、味わうこと、世界の美しさを感じることの大切さを詠っていた。多数の本を読むことはよい。あるいはその結果博識・博学という勲章を得ることもできよう。しかし、その榮譽は必ずしも百パーセント保証されているわけではないし、わずかしか本を読まずとも、あるいはまったく読まずとも物識りの人がいることも忘れてはならない。読書量と知識量は正比例するわけではないということだ。

長田弘の詩も、むしろ、本を捨てよ、と勧めていたのではないか。なにしろ、この詩人にとってあらゆるものが本なのだから、紙の本を捨てたところではどこにでもあるのだ。世界に本でないものはないのである。

書かれた文字だけが本ではない。
日の光り、星の瞬き、鳥の声、
川の音だって、本なのだ。
ブナの林の静けさも、
ハナミズキの白い花々も、
おおきな孤独なケヤキの木も、本だ。
本でないものはない。
世界というのは開かれた本で、
その本は見えない言葉で書かれている。
ウルムチ、メッシナ、トンブクトゥ、
地図のうえの一点でしかない
遙かな国々の遙かな街々も、本だ。
そこに住む人びとの本が、街だ。
自由な雑踏が、本だ。
夜の窓の明かりの一つ一つが、本だ。
シカゴの先物市場の数字も、本だ
ネブド砂漠の砂あらしも、本だ。
マヤの雨の神の閉じた二つの眼も、本だ。
人生という本を、人は胸に抱いている。
一個の人間は一冊の本なのだ。
記憶をなくした老人の表情も、本だ。

草原、雲、そして風。

黙って死んでゆくガゼルもヌーも、本だ。

眺望が広く、何と風通しのよい詩だろうか。「書かれた文字だけが本ではない」と読みかけの本のページを開いたままで捨て置き、開かれた世界への旅立ちを勧めているからだ。一方、三木清の読書論が窮屈なのは本が捨てられないからだ。本を捨てる自由が考慮されていないからである。乱読そのものを否定しているわけではないが、好ましくないものとして切り捨てているからだ。読書はもっと自由でよいはずだ。読む自由もあれば、読まない自由もある。善い本を読む自由もあれば、悪書を読む自由もある。捨てる自由もあれば、拾う自由もある。立派な学者にならなくてもよい。物識りになれなくてもよい。出会ったものを楽しく読む。楽しく捨てる。また楽しく読む。それで善いのではないだろうか。「当為」の多い読書論は、内容がどんなに優れていても、窮屈だ。

7

若い頃「ぼくは快感原則に生きるのだ」と友人に宣言したことがある。要は、自分の好きなことだけして生きるのだと、親の脛をかじっていた世間知らずの若造が酔っ払ってほざいていただけのことだが、今思うとかなり真剣だったし、確かにその原則に則って生きようとしていた。「快感原則」とは精神分析学者フロイトの用語で「現実原則」の反対の意味を表すが、たぶん私はフロイトから言葉だけ借りて、実際にはむしろ「快感原則」という言葉から古代ギリシャ、ヘレニズム期の哲学者エピクロスの「快樂主義」をイメージしていたようだ。

これが乱読に影響し、乱読に拍車をかけたにちがいない。単にイメージしていただけで、エピクロスの哲学を極めようと努力したわけではないが、生活全般において、自分に好ましいことを追求した。当たり前じゃないか、誰だってそれを追求しているんだよと横槍が入りそうだが、追求はしても誰しもが実現できるわけではないし、そもそもそのような生き方を意識的にしているかしていないかの違いは大きい。学生であったり、大学院生であったりしたから、当然読まざるを得ない本は多々あった。しかし、それらの本を読む時間の何倍もの時間を読みたい本を読むのに費やした。課題として出された本を読むことが「現実原則」だったとしたら、古本屋で見つけて読みたいと思った本読むことが「快感原則」だったのだ。

就職とか将来のことをまったく考えなかったわけではない。が、「現実原則」に費やす時間を極力縮小して、「快感原則」に生きる時間を拡大・充実させた。「快感原則」の読書は当然ながら乱読・多読である。乱読・多読を続けていくうちに、三木清が書

いていたように、自ずと系統立った読書もできるようになったが、その系統を自立させて専門化することはしなかった。そのようにしたら、その系列化された書物群が他の書物を排除しかねないからだ。また読書は自由の喜びを失い「現実原則」化してしまう恐れがあったからである。ディレッタンティズ、アマチュアリズムとの誹りを受けるかもしれない。エピキュリアンの徒と後ろ指さされるかもしれない。しかし、このような読書のための読書がもっとも楽しいことは経験から断言できる。お陰で長い間読書の楽しみを見失うことがなかった。

読書の楽しみは乱読にあり。乱読こそが楽しみの源泉である。何度も繰り返すが、三木清の読書法を否定するものではない。そこにも深い読書の喜びはあるだろう。とはいえ、それがいくら立派な読書の仕方であろうとも、誰もが求める読書法ではないし、読書の喜びの源泉である乱読・多読につねに戻りたいと思うのである。